岩波文庫

32-542-3

月曜物語

ドーデー作
桜田佐訳

岩波書店

月曜物語

1936年 2 月10日　第 1 刷　発　行
1959年 6 月 5 日　第22刷改版発行 ©
1980年12月10日　第44刷　発　行

定価 350 円

訳　者　桜田佐（さくらだたすく）

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・理想社　製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

岩波文庫

32-542-3

月曜物語

ドーデー作
桜田佐訳

岩波書店

目　次

第一部　幻想と物語

最後の授業……一二
玉突き……一八
コルマールの裁判官の幻想……二四
少年の裏ぎり……三〇
母親……四一
ベルリン攻囲……四九
わるいアルジェリア兵……五九
ブジヴァルの置時計……六六
タラスコンの防御……七四
ベリゼールのプロシア人……八三
パリの百姓……九〇
前しょう線にて……九五
暴動風景……一〇四

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

渡し舟……一一〇
旗手……一一六
ショーヴァンの死……一二四
アルザス！　アルザス！……一三〇
隊商宿……一三六
八月十五日の叙勲者……一四一
私の軍帽……一四九
コミューヌのアルジェリアそ撃兵……一五四
第八中隊の演奏会……一六〇
ペール・ラシェーズの戦い……一六五
小まんじゅう（ブチ・バテ）……一七〇
船上独語……一七七
フランスの魔女……一八二

第二部　空想と追憶

書記……一九一
ジラルダンが約束した三十万フランで！……一九七

アルテュール……二〇二
三つの警告……二〇九
初演の夕……二一五
チーズ入りスープ……二二〇
最後の本……二二四
売家……二二九
クリスマスの物語――マレー街の降誕祭の祝宴……二三六
法王様がなくなった……二四三
味覚風景……二四九
海辺の収穫（とりいれ）……二五四
赤しゃこのおののき……二六〇
鏡……二六九
盲目（めくら）の皇帝……二七三
注……二九三
解説……二九九

月曜物語

エルネスト　ドーデーにささぐ

第一部　幻想と物語

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

最後の授業

アルザスの一少年の物語

その朝は学校へ行くのがたいへんおそくなったし、それにアメル先生が分詞法の質問をすると言われたのに、私は丸っきり覚えていなかったので、しかられるのが恐ろしかった。一時は、学校を休んで、どこでもいいから駆けまわろうかしら、とも考えた。

空はよく晴れて暖かった！

森の端でつぐみが鳴いている。リペールの原っぱでは、木びき工場の後でプロシア兵が調練しているのが聞こえる。どれも分詞法の規則よりは心を引きつける。けれどやっと誘惑に打ち勝って、大急ぎで学校へ走って行った。

役場の前を通った時、金網を張った小さな掲示板の傍に、大勢の人が立ちどまっていた。二年前から、敗戦とか徴発とか司令部の命令とかいうようないやな知らせはみんなここからやってきたのだ。私は歩きながら考えた。

『今度は何が起こったんだろう？』

そして、小走りに広場を横ぎろうとすると、そこで、内弟子と一しょに掲示を読んでいたかじ屋のワシュテルが、大声で私に言った。

『おい、坊主、そんなに急ぐなよ、どうせ学校には遅れっこないんだから！』

かじ屋のやつ、私をからかっているんだと思ったので、私は息をはずませてアメル先生の小さな庭の中へ入っていった。

ふだんは、授業の始まりは大騒ぎで、机を開けたり閉めたり、日課をよく覚えようと耳をふさいでみんな一しょに大声で繰り返したり、先生が大きな定規で机をたたいて、

『も少し静かに！』と叫ぶのが、往来まで聞こえていたものだった。

私は気づかれずに席に着くために、この騒ぎを当にしていた。しかし、あいにくその日は、何もかもひっそりとして、まるで日曜の朝のようだった。友だちはめいめいの席に並んでいて、アメル先生が、恐ろしい鉄の定規を抱えて行ったり来たりしているのが開いた窓越しに見える。戸を開けて、この静まり返ったまっただなかへ入らなければならない。どんなに恥ずかしく、どんなに恐ろしく思ったことか！

ところが、大違い。アメル先生は怒らずに私を見て、ごく優しく、こう言った。

『早く席へ着いて、フランツ。君がいないでも始めるところだった。』

私は腰掛けをまたいで、すぐに私の席に着いた。ようやくその時になって、少し恐ろしさがおさまると、私は先生が、督学官の来る日か賞品授与式の日でなければ着ない、立派な、緑色のフロックコートを着て、細かくひだの付いた幅広のネクタイをつけ、刺しゅうをした黒い絹の縁なし帽をかぶっているのに気がついた。それに、教室全体に、何か異様なおごそかさがあった。い

ちばん驚かされたのは、教室の奥のふだんは空いている席に、村の人たちが、私たちのように黙って腰をおろしていることだった。三角帽を持ったオゼールじいさん、元の村長、元の郵便配達夫、なお、その他、大勢の人たち。そして、この人たちはみんな悲しそうだった。オゼールじいさんは、縁のいたんだ古い初等読本を持って来ていて、ひざの上にひろげ、大きなめがねを、開いたページの上に置いていた。

私がこんなことにびっくりしている間に、アメル先生は教壇に上り、私を迎えたと同じ優しい重味のある声で、私たちに話した。

『みなさん、私が授業をするのはこれが最後です。アルザスとロレーヌの学校では、ドイツ語しか教えてはいけないという命令が、ベルリンから来ました……　新しい先生が明日見えます。今日はフランス語の最後のおけいこです、どうかよく注意してください。』

この言葉は私の気を転倒させた。ああ、ひどい人たちだ。役場に掲示してあったのはこれだったのだ。

フランス語の最後の授業！……

それだのに私はやっと書けるくらい！　ではもう習うことはできないのだろうか！　このままでいなければならないのか！　むだに過ごした時間、鳥の巣を捜しまわったり、ザール川で氷滑りをするために学校をずるけたことを、今となってはどんなにうらめしく思っただろう！　さっきまであんなに邪魔で荷厄介に思われた本、文法書や聖書などが、今では別れることのつらい、

昔なじみのように思われた。アメル先生にしても同様であった。じきに行ってしまう、もう会うこともあるまい、と考えると、罰を受けたことも、定規で打たれたことも、忘れてしまった。

きのどくな人！

彼はこの最後の授業のために晴着を着たのだ。そして、私はなぜこの村の老人たちが教室のすみに来てすわっていたかが今分かった。どうやらこの学校にあまりたびたび来なかったことを悔んでいるらしい。また、それは先生に対して、四十年間よく尽してくれたことを感謝し、去り行く祖国に対して敬意を表するためでもあった……

こうして私が感慨にふけっている時、私の名まえが呼ばれた。私の暗しょうの番だった。このむずかしい分詞法の規則を大きな声ではっきりと、一つも間違えずに、すっかり言うことができるなら、どんなことでもしただろう。しかし最初からまごついてしまって、立ったまま、悲しい気持で、頭もあげられず、腰掛けの間で身体をゆすぶっていた。アメル先生の言葉が聞こえた。

「フランツ、私は君をしかりません。充分罰せられたはずです……そんなふうにね。私たちは毎日考えます。なーに、暇は充分ある、明日勉強しようって。そしてそのあげくどうなったかお分かりでしょう……　ああ！　いつも勉強を翌日に延ばすのがアルザスの大きな不幸でした。今あのドイツ人たちにこう言われても仕方がありません。どうしたんだ、君たちはフランス人だと言いはっていた。それなのに自分の言葉を話すことも書くこともできないのか！……　この点で、フランツ、君がいちばん悪いというわけではない。私たちはみんな大いに非難されなければなら

ないのです。』

『君たちの両親は、君たちが教育を受けることをあまり望まなかった。わずかの金でもよけい得るように、畑や紡績工場に働きに出すほうを望んだ。私自身にしたところで、何か非難されることはないだろうか？　勉強をするかわりに、君たちに、たびたび花園に水をやらせはしなかったか？　私があゆを釣りに行きたかった時、君たちに休みを与えることをちゅうちょしたろうか？……』

それから、アメル先生は、フランス語について、つぎからつぎへと話を始めた。フランス語は世界じゅうでいちばん美しい、いちばんはっきりした、いちばん力強い言葉であることや、ある民族がどれいとなっても、その国語を保っているかぎりは、そのろう獄のかぎを握っているようなものだから、私たちのあいだでフランス語をよく守って、決して忘れてはならないことを話した。それから先生は文法の本を取り上げて、今日のけいこのところを読んだ。あまりよく分かるのでびっくりした。先生が言ったことは私には非常にやさしく思われた。私がこれほどよく聞いたことは一度だってなかったし、先生がこれほど辛抱強く説明したこともなかったと思う。行ってしまう前に、きのどくな先生は、知っているだけのことをすっかり教えて、一どきに私たちの頭の中に入れようとしている、とも思われた。

日課が終ると、習字に移った。この日のために、アメル先生は新しいお手本を用意しておかれた。それには、みごとな丸い書体で、「フランス、アルザス、フランス、アルザス。」と書いて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com